最強の転生者って俺……？

近衛龍一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
最強の転生者って俺……？

【Ｎコード】
Ｎ１４０４Ｙ

【作者名】
近衛龍一

【あらすじ】
大型トラックに引かれたと思ったら何故か目の前には広々とした草原が……？最強魔導師として転生した五月雨浩平が慣れない異世界で魔法ギルド仲間達と共に成長していく……？

プロローグ

「あぁ……今日も疲れた……」

俺の名前は五月雨浩平（さみだれこうへい）。
成績は中の下、ルックスも中の下で、運動神経もいたって普通のモテない高校生二年生である。

ファッションといえば、伊達メガネだけで、特に気をつかっている訳でもなく、部活にも入っていない。
そのせいもあってか彼女なし。

青春？　何それ食えんの？

そしてそんな俺は、今日も元気に学校へ。
いつもと同じく影のような存在で一日を終え、趣味のライトノベルを学校近くの本屋で買って帰宅中。
信号待ちで携帯を見るとメールが三件入っていたが、どれもオタク友達からだったので無視。
携帯を閉じ、そろそろ信号が変わる頃だと前方を見たが、未だに赤信号だった。

ちっ……まだ変わんないのかよ……

「あ、危ない！！」

イライラする気持ちを抑えていると、突如信号待ちの人だまりの中から声が上がった。

パッとみると赤信号の最中、５歳くらいの男の子が、他の人と話してるお母さんから離れて車道に飛び出していた。

すぐ近くには大型トラックがクラクションを鳴らして迫っている。

く……っ！　誰も行かねえのかよっ！

『あー！！』と声をあげるだけの大人を見兼ねた俺は、鞄と本を放り投げダッシュでその男の子を助けに行く。

男の子を掴んだときにはトラックは残り５メートルほど。

ま、間に合わねえ！！

そう感じた俺は、その男の子だけを歩道に投げる。

俺自身は間に合わないか……

何か俺の地味な人生には派手な死に方だな……

坊主、俺の分までしっかり生きてくれよ……

ライトノベルを読むことが出来なかったことだけを後悔しながら、死を覚悟する。

そしてそのまま、俺はトラックのカーライトの光に包まれながら目を閉じた。

目を開けてみると……？（前書き）

新連載です！
よろしくお願いします！

目を開けてみると……？

「あ、あれ……？」

来るべき衝撃に身を構えていたのだが、一向にその衝撃が来ない為、俺はゆっくりと目を開けた。

「こ、ここは……？」

目の前に広がったのはアスファルトの道路ではなく、広い広い草原だった。

しかも、夜ではなく太陽が出ているためやけに眩しく感じ目を細める。

お、俺って確かトラックに引かれかけてたんじゃ……？

自分の思っていた状況と、目の前に広がる景色があまりにも違うため、とりあえず頭の中を整理することに。

・学校帰りに『バカ〇ス』の小説を買って帰っていた。

←

信号待ちで携帯を確認。

←

通行人Ａのあげた声で５歳ほどの子どもが道路に出ていたことに気づく。

←

誰も助けに行かなかったので俺が助けに行った。

←

行ったのはいいが、大型トラックがすぐそこまで来ていた為もう間

に合わないということが分かる。
←
とりあえずその子どもだけでもと思い投げる。その時点で俺は助からなくなる。
←
死を覚悟し、目を閉じる。
←
目を開けると壮大な草原が。

……やっぱおかしくね！？
何でいきなり草原なんだ！？
落ち着け、落ち着くんだ俺…。
そんなわけないだろ？
きっと死ぬ間際の幻覚なんだよ。
頬を抓ればこんな幻覚もなくなるはず…っ！

と、思ってギュゥゥっと頬を抓る。が、

「……ひゃっぱり変りゃん……」

いや、分かってたよ……？
あのタイミングでこんな長い幻覚なんて見るわけないからね…？
うう〜〜っ、とない脳をフルに回転させて考えを絞り出す。

「……もしかするとここは天国の地獄の狭間……？」

確かいい行いをしながら死ぬとと神様が出てきて云々とか、『本当はお前は死ななくてよかったんだがこちらの手違いで』とかいう展開があったような……
ありえない話ではあるがもしかするともしかして……

自分でも信じ難いがそういう考えが出てくるところがオタクぽいよな。

まあそれはともかく、さっきの考えからするとこの辺で神様が登場するはず……

「お～い！　神様！　この辺にいるんじゃないのか？　いるなら返事してくれ！」

『ガルルルゥゥ！！』

俺の呼びかけに応えてくれたのは残念なことに神様の声ではなく狼らしき動物の唸り声。

はぁ……やっぱ狼くらいしか返事を……って狼！？

バッと振り返ると一匹の目つきの悪い狼がヨダレを垂らしながら値踏みするかのようにこちらを睨みつけていた。

……もしかしてこれ、死亡フラグ？

「ガルゥーー！！」

雄叫びと共に飛びかかってくる狼。

それとほぼ同時に走り出す俺。

もうここが何処かなんてどうでもいい。

とにかく今は……

「ついさっき死ぬ思いしたのにまた死ぬなんて嫌だぁぁーーー！！」

意味の分からんところでくたばるなんてゴメンだ！

まだちっちゃい子を助けてくたばった方が華があるのにっ！

神様、あなたはそこまでして俺を惨めにしたいんですか！？

「うおぉぉーー！！」

火事場の馬鹿力。

今それを猛烈に体感しながら、全力で走る。

しかしお約束というものがあって、こういうときにこそ転ける。

コツン！

「おわっと！？」

そのお約束通りに転けた俺。

ほんと、惨めだぜ……

後ろにはゆっくりと近づいてくる狼。

逃げ場はない。万事休すか……

と、思ったそのときーー

「火炎弾（フレイム）！！」

どこからともなく、火炎弾が飛んでき、狼にクリーンヒット！

「グルゥーー！？」

狼は突然の攻撃を避けれず、痛そうな声を出して逃げ去る。

た、助かった……

「す、すみません、ありがとうございました」

本当に助かった。

きっと今の助けがなければ俺は死んでいたはずだ……

「いや、気にすんな。当たり前のことをしただけだ」

助けてくれた人の方をみると、俺と同い年くらいの青年が、見慣れない服で立っていた。

おおっ、人だ！

助けてくれたのだから当たり前だが何となく新鮮な感じがする。

「それより、お前はこんなところで何をしてんだよ？魔法は使えないのか？危ないぞ？」

「ま、魔法……？」

魔法って…あれだよな？

有名な某巨大魔法学校に通うメガネの少年が杖を振って使うあれだよな？

「何だよその初めて聞きましたみたいな顔は？」

そういって、その青年はボウッと手に炎を出す。

……ヤベ……何がなんだかもっと分からなくなってきたよ……

現状理解……できるのか？

「お、お前本当に魔法を初めて見たのか……？」
「え…？　ま、まあ魔法というものは知ってるけど見るのは初めてっていうか…」
「今どき珍しい奴だな……名前は？」
「な、名前？　五月雨浩平って名前だけど」
「サミダレコウヘイ？　聞いたことない名前だな。どこから来たんだ？」
「来たというよりかいつの間にか居たんだが……元は江戸川区に住んでた」
「エドガワク？　知らねえな……」
「そ、そうだよな。日本ってところの地名だ」
「ニホン？　聞いたこともねえや。クトファニア大陸辺りの小さな国か？」

な、なんだその大陸は……？
そんなところあったっけ？

「ク、クトファニア？　違う違う。ユーラシア大陸だ」
「さっきからエドガワクだのニホンだのユーラシアだの言ってるが、全然聞いたこともねえぞ？」
「えっと……じゃあここは？」
「ここ？ここはセルノスに決まってるだろ」
「セルノス……」

やっぱり聞いたことがない……
この人は日本を知らないようだし……
一体どうなっているんだ？

「お前の名前はなんていうんだ？」
「俺か？　俺はリクト・フェリネウスだ」
その時俺は『あれ？』と思った。
『リクト・フェリネウス』。
リクトはともかく、フェリネウスは漢字じゃまず表せないだろう。
日本人とのハーフという可能性もあるが、先ほどの会話と合わせて、ここは日本じゃない。
それどころか、ここが俺の知っている世界なのかすら怪しい。

転生

小説などである設定だが、俺の頭の中でその薄っすらとしていた予想がだいぶ形づいてきた。
だが、その裏づけが証明されていくにつれて現れた疑問。
なぜ俺とこの人は会話をしているんだろうか？
ここが日本でないとすれば今話しているのが日本語でないことになる。
だが俺は日本語と英語が少し話せるだけだし……

「な、なあ…ええっと……」
「リクトでいいよ」
「サンキュ。じゃあリクト、今お前って地図は持ってるか？」
「地図？　ああ、持ってるぞ」
後ろに背負っていたカバンらしきものから一枚の紙を取り出してくれた。
それを受け取って広げると、俺は驚いた。

「こ、これは……！」

地図が全く一緒なのだ。俺がよく学校見たりするような日本の地形とほぼ一緒。
話が分からなくなってきた……っ！

「ち、ちなみに聞いておくが、今の俺達って大体どの辺りにいるんだ？」
「今は……ここだな」

そう言ってリクトが指した場所。
それは紛れもなく、俺が住んでいた東京、しかも江戸川区近辺だった。

「重ね重ね悪いが、世界地図……というか、他の大陸まで載った地図、あるか？」
「ああ、勿論あるぞ」

ある一つの仮定を思いついた俺は、リクトから受け取ったもう一つの地図を広げた。
やっぱりな……

もう一つの地図にはやはり日常でよくみる世界地図がそこにはあった。
ということはここは俺の元居た世界じゃなく、その元居た世界に似た世界ってことだ。

うん、確定。俺はきっと何かの拍子……とはいっても、それはきっとあの事故が原因だな。

まあそれの所為で異世界に転生、トリップしちまったってわけか。
きっと言葉が通じるのは俺の方が別の言葉を話しているんだろう。
一度、何かの本で転生（ライトノベル）すれば転生先の言葉が自然と分かるって言ってたし。

……って結論だしちゃったけどそれってヤバくね！？
元の世界に帰る方法知らないからわかんねえじゃん！！

「どうしたんだよコウヘイ。まるで異世界に飛ばされたやつが帰る方法分からないから戸惑ってますみたいな顔してよ」

いや、その通りですよ！？
戸惑いますけど！？

「な、なあコウヘイ？　その絶望みたいな顔やめろよ。家はどこだ？　魔法使えないんじゃ話にならんから俺が送ってやるよ。危険だしな」
「その家なんだが……俺にはない……」
「い、家がない？」
「あ、ああ……」

正しくはこの世界にはない、だが。
まあそれも俺の仮説が正しければの話だがな。

「そうか……」

リクトも考えこむようにして顎に手を添える。
そしてゆっくりと口を開いて、俺にこう告げたのだった。

「ならさ、とりあえず俺のところの魔導師ギルドに来ないか？」

うん、なんだか凄い展開になってきたぞ……？

自由の龍

俺はギルドに連れていってやると言ったリクトについて行った。
広い草原から一変、市場のような街に入っていった俺達。
石造りの町並みは海外映画にも出てきそうだ。
ふと俺はリクトを見る。
身長は１７５センチくらい。まあ俺と同じくらいだな。
だが俺とは違い、小顔で整ったその顔立ちは羨ましく、妬ましい。
異世界（？）とはいっても同じ人間なのにどうしてこうも違うんだ……？
そして真っ赤に燃えるような赤髪は、先ほどリクトが使っていた火の魔法を連想させる。

「な、なあリクト。魔導師ギルドってどんな風なんだ？」
「コウヘイは魔導師ギルドまで知らねえのか？魔導師ギルドは、魔法を使って仕事するやつらが集まる場所なんだ。ギルドに依頼の仕事が入るから、魔導師は仕事を求めてギルドに入るんだ」
「説明ありがと。だが俺は魔法を使えないんだぜ？なのにギルドに行ってどうするんだ？」
「ウチのギルドは仕事場ってだけじゃないんだよ。困ってるやつは助ける。というより、そういうやつらが集まってるギルドなんだ」
「そういうやつら？」
「ああ。小さい頃に色々あって親を失くしたやつらが、ギルドにきて働く。魔力を持ってないやつらも、ギルドの雑用とかして働いてるんだ」
「へぇ～。というか、ウチのギルドってことは他にもギルドってあるんだな」
「当たり前だ。世界中に何百ものギルドが存在してる」

それだけ魔法が広まってるってわけか。
やっぱ元の世界と全然違うな……

「リクトたちのギルドって有名なのか？」
「ああ。俺たちは世界でもトップレベルのギルドだ」
「トップレベルのギルドって入るのが難しいだろ？」
「俺たちのところは関係ねえ。さっきも言ったろ？困ったやつは助ける。これがギルドの決まりだからな」
「そっか。いいギルドだな」
「ありがとよ」

ギルドかぁ……
昔何度かパソコンのオンラインゲームなんかで見たことはあるが、この世界にはそれが普通なんだな。

「それよかコウヘイ、お前の着てる服って何だ？あんまり見ない服だが……」
「これか？　学生服だよ。さすがに見たことあるだろ」
「学生服……？」
「ほ、ほら。学校に行くとき着ていく制服だよ」
「学校？　ああ、勉強をしに行くところな。でも学校に制服なんてないだろ」
「あー……俺のところはあったんだよ」

こっちには制服がないのか……

「へえ。ってことはコウヘイは学校に行ってたんだな」
「ま、まあ……。リクトは行ったことないのか？」
「行ったことねえ。物心ついたときからギルドに入って魔法の修行してたんだ」

「物心ついたときから？　両親は？」
「知らねえ。気づいたらギルドに入ってて、親の顔は……覚えてないんだ」
「そうなのか……わ、悪いな。そんなこと話させて……」
「いいんだよ。別に気にしてねえし。今は親のことよりも早く一人前になってギルドの仕事をしたいと思ってるんだ」
「え？　リクトってまだ仕事してないのか？」
「マスターが子供はまだダメだって言ってやらせてくれねえんだよ。今だってちょっとマスターに頼まれて出て行って、その帰りにコウヘイを見かけたんだ」

意外だな……
さっきの魔法だって狼を一発で追い返したんだし十分強いと思ったんだけど……
まあそう簡単じゃないってことなのか？

「そろそろ仕事も出来るようになるはずなんだが……っと。着いたぞリクト」
「ふぇ？」
「ここが俺が所属してるギルド、『自由の龍（リバティドラゴン）』だ」
「自由の龍…リバティドラゴン……」
「そうだ。由来はギルド皆でセルノスの住人が規則に縛られない自由な生活を送れるようにこの街を守る役目。それを龍に例えたんだ」

それで『自由の龍』か……
住人の自由を守る龍……いいじゃねえかよ、その由来……
それにしてもデカイな……
どこぞやの城のみたいだ……

「ほらコウヘイ、入れよ」

「お、おう」

俺はリクトに続いて、そのデカイ建物に入っていった。

「ただいま！　マスター！　今帰ったぞ！」
「おおリクト。帰ってきたか」
「あ！　リクト！　お帰り！」

リクトが一人のおじいさんみたいな人に挨拶すると、そのおじいさんと近くにいた女の子が返事をした。
あの人がマスターなのか。

建物の内装は、広々とした小洒落ていた。
そこでは大勢の大人が飲んだり、掲示板に貼ってある紙を見ていたりした。
おいおい……昼間から酒かよ……

そんな中、リクトがマスターと呼ぶ男に近づいていく。
俺も慌ててついて行くと、周りで飲んでいた人たちもリクトに『おかえり』と声をかけたりしている。
結構仲がよさそうだな。

「ただいまマスター」
「おおリクト。頼みごとは大丈夫か？」
「もちろん。ちゃんと婆さんに届けてきた」
「それは助かった。して、その後ろの少年は誰じゃ？」
「帰りに狼に襲われているところを助けたんだ」
「ど、どうも。五月雨浩平といいます」
「ふむ……珍しい名前じゃな。どこから来たのじゃ？」
「ええっと……説明しづらいといいますか、なんと言いますか……」

「どういうことじゃ？」
「それがよ、コウヘイのやつ、ニホンだのエドガワクだの意味の分かんねえこと言うんだよ」
「ココの辺りの者ではないということか？」
「まあ、はい」
「んで、家もないって言うからギルドに連れてきたんだ」
「そういうことか。ワシはこのギルドのマスター、クロレス・ロディアじゃ。お主……コウヘイでよいな？　コウヘイは魔法は使えるのかの？」
「い、いえ……使えないです」
「……ちょっといいかの？」
「へ……？」

突然マスターであるクロレスさんが俺の額に手を当ててきた。
い、一体どうしたんだ！？

「ふむ……やはりな」
「な、何がやはりなんでしょうか……？」
「コウヘイ、お前は魔法を使えるぞい。お主は立派な魔導師じゃ」
「……はいぃーーーーーっ！？」

何……？
どういうこと……？
俺、どうなっちゃうの……？

零魔法

よし、落ち着け俺。
今俺はこの人になんて言われた？
『お前は立派な魔導師だ』
うん、そんなわけないよね？
だって転生だよ？
神様を通じてもないのに魔力なんて持ってるわけないじゃん？
「あ、あの…クロレスさん？僕が魔法を使えるというのはないと思うのですが……」
「そう思うのならば手を前に出すがよい」
「は、はぁ……」
とりあえず言われた通りに手を前に出す。
これで魔法が使えないって証明出来るのか？
「よいか？　これで『我、魔法を操る者なり。汝、我の使う魔法を示せ』と言うのじゃ。それで魔法陣が出てくれば魔法が使えるということ。ついでにコウヘイの使える魔法が分かるということじゃ」
「わ、分かりました」
手の汗を拭き取り、再び手を前にやる。
これで魔法が使えるかどうかが分かるんだな？
「『我、魔法を操る者なり。汝、我の使う魔法を示せ』！」

俺が言われたとおりにそう唱えると……

キュイン！

「な……っ！」

魔法陣が俺の手に現れ、広がる。

ってことは俺って魔法が使えるの！？

「ふむ……やはりな」

クロレスさんは頷いている。

ま、待て……魔法が使えるってことは俺はどんな魔法が使えるんだ？

俺は自分が使える魔法がどんなものかと、何が出てくるのかドキドキし、その魔法が現れた。

「え……？　何これ……？」

現れたのは透明な何か。

なぜ透明なのかが分かったのかというと、薄っすらと見える境界線があったから。

なんだかデカいシャボン玉のようで強そうではない。

しかも、それが波動弾とかであれば発射されるのであろうが、全くその気配もなく、俺の手に引っ付いたまま。

何なんだよこれ！？

使えねえ！？

悲しくなるような俺の魔法。

これじゃあ使えねえほうがマシじゃねえか……？

リクトも『あ〜あ』といった様子でこちらを可哀想なものを見る目で見ている。
だが、クロレスさんは違った。

「こ、これは……っ！？」

何故か知らんが目を見開いてとても驚いていた。

「あ、あの……クロレスさん……？　俺の魔法って一体なんなんですか……？」
「零魔法……」
「へ……？」
「ゼ、零魔法じゃ……まさかこれを使える者がいたとは……っ！」
「マ、マスター。零魔法ってなんだよ……？」
「伝説の魔法（レジェンドマジック）の一つじゃ……」
「レ、レジェンドマジック！？」

な、なんだなんだ？
クロレスさんだけじゃなくて、リクトまで驚きはじめたぞ……？
この使えなさそうな魔法がそんなに凄いのか……？

「い、いや。まだそうとは決まっとらん。リクト、少し離れてコウヘイに向かって魔法を放つのじゃ」
「お、おう！」
「何ですと！？」

いや、『おう』じゃねえよ！？
あんなもん食らったら死ぬぞ！？

そんな俺の訴えを露知らず、リクトは俺から離れて手を出す。
というか建物内で魔法を放ってもいいのか……？

「火炎弾（フレイム）！」

狼を追っ払ったのと同じ火炎弾が俺の方へ飛んでくる。
ヤベッ！　当たる！
そう思って瞬時に目を瞑った。
気分は丸で、トラックに引かれそうになったあの瞬間と一緒だ。

シュウゥゥ

そんな音と同時に目を開けると、向かいに立つリクトがこう呟いた。

「お、俺の魔法が吸い込まれた……？」
「ｗｈａｔ？」

おっと。
驚きすぎて英語が出てしまった。

どういうことだ？
魔法が吸い込まれただと……？

「やはり零魔法じゃ……ウィリム、アレックス！　ちょいと来てもらえるかの？」

何かを確信したようなクロレスさんが二人の名前を呼ぶと、その二人が返事をしてこちらへ来た。

「お主ら、今の様子を見ておったな？」

「は、はい。見ていました」
「もちろんです」
「ならば、次はお主らがこやつに向かって魔法を放つのじゃ。同時でよい」
「わ、分かりました」

ちょっと待って！？　どういうことすっか！？
今の二人ってどうみても大人だよね！？
リクトであの強さなのに大人の魔法なんてヤバくない！？

「安心するのじゃコウヘイ。お主の魔法は魔法を吸収する魔法じゃ」
「え？　そ、そうなんですか……？」

な、なら安全じゃん。
じゃあなんでクロレスさんはまた同じことをするんだ？

「烈風弾（トルネード）！」
「吹雪（スノーストーム）！」

二人の手の魔法陣から、発射させた竜巻と吹雪はそれぞれが重なって一つのものとなり、俺に向かって襲いかかってくる。
って、あれデカくね！？

明らかに俺が出しているシャボン玉のようなものよりも大きい魔法は勢いよく突っ込んでくる。

本当であれば目を瞑っているだろうが、何となく魔法が吸収されるところを見てみたくて目を開けたままにした。
すると、

シュウゥゥ

さっきのと同じ音を出しながら、その大きな魔法を吸い込んでいった俺の魔法。
まるでブラックホールに吸い込まれるかのように中心に吸い寄せられた。

や、ヤベえ……この魔法強くね？

「ま、また吸い込まれた……」
「まだじゃ。これからが本番じゃ。コウヘイよ、今度はお主が攻撃する番じゃ。ワシから離れてワシに向かって呪文を唱えるのじゃ。呪文は『反転（カウンター）』じゃ」
「は、はい。分かりました」

指示通りクロレスさんから離れて呪文を唱える。

「反転（カウンター）！」

ドオォォン！

そんな凄まじい号砲が鳴ったかと思うと、俺の魔法陣から物凄い大きさの魔法弾が出て、クロレスさんを襲った。

「だ、大丈夫ですか！？」
「うむ。大丈夫じゃ」

クロレスさんはいつ張ったのか、自分を包んでいた透明な壁みたいなものを消すと、何かを確信したように近づいてきた。

「やはりお主が使える魔法は『零魔法』、伝説の魔法（レジェンドマジック）じゃ」

何なんだよそのチートみたいなやつは……？

なんで俺がそんなものを使えるんだ……？

真の効果、ギルド入門

零魔法。
伝説の魔法の一種で、あまりの強さの為使える者がいなくなり、伝説の魔法とされている物。
相手の物理系以外の魔法を吸収することができ、また吸収した魔法を二倍の威力で相手に返すことができる。
更に複数の魔法を吸収すれば、それを混合した魔法も放つことが可能。
これが現在分かっている、俺の魔法なんだが……

「で、それを何で俺が使えるんでしょうか……？」
「それはワシにも分からんな。それとコウヘイよ。その零魔法にはもう一つ効果があるのじゃ」
「へ……？　ただでさえチートっぽいのにまだあるんですか？」
「うむ。というより、それだけでは伝説とは呼べんじゃろうが。物理系の魔法を使うやつには負けるんじゃしの」
「そ、それはそうかもしれませんが……」

基本的に何にでも弱点ってあるんじゃないのか……？
伝説の魔法っていってもこれ以上の効果って……？

「そしてそのもう一つの効果こそがコウヘイの魔法が零魔法と呼ばれる理由なのじゃよ」
「ええっ！？　今のが本命の効果じゃないんですか！？」
「当たり前じゃ。伝説の魔法はそんなに軟なものではない零魔法のもう一つの効果、それは……」
「そ、それは……？」（ゴクッ）

「魔法を創ることが出来る」
「ああ、何だ。魔法が創れる……ってええぇぇーーっ！？」
ま、魔法が創れる！？
何だよその最強設定は！？
「マ、マスター！　一体それはどういう意味だよ！？」
「そのままじゃ。コウヘイが思った通りの魔法が創りだせるのじゃ。ただ、直接的に敵を殺すような魔法は創り出せんがの」
「い、いや、創りだせなくても強すぎでしょ！　というか、クロレスさんは何でそんなことを知ってるんですか？」
「ワシの知り合いにもおったんじゃよ。その伝説の魔法を使える人物がの。強かった。ワシは一度も勝ったことがなくてのぉ……」
いやそりゃそうでしょ！
魔法を好きに創れるやつに勝てるわけないじゃん！？
「今どうしておるのかは知らんが、まさか生きている内に二人も伝説の魔法を使うに出会うとは……」
「ちょ、ちょっといいかコウヘイ。一度魔法を創ってみてくれないか……？」
「へ……？　あ、ああ！　そうだな。試してみるか」
「ふむ。ならばまたワシに向って魔法を放つがよい」
「ありがとうございます。では……」
どんな魔法を放とうか……？
雪……氷……水……火……
どれも強そうだしなぁ……
よしっ！そんじゃ闇の魔法でも使ってみるか！

「いきます！　闇の波動（ダークウェーブ）！」

俺の手からは俺の想像した通りの渦渦しい黒い闇がクロレスさんに放たれた。

クロレスさんは平然とそれを受け止めたが、満足そうな顔をしてこちらに戻ってくる。

「いい出来じゃ。やはり素晴らしい魔法じゃ。これが零魔法と呼ばれる理由なんじゃよ。無から魔法を創る。だから、零魔法じゃ」

「無から魔法を……」

凄え……

俺が使ったのに今だに信じられねぇ……

なんというか、凄い。

何で俺がこの魔法を使えるのかは分からないが、凄く感動する。

魔法ってこんなに面白いんだ……！

「さて、それではコウヘイよ。お主はこのギルドに入るかの？」

「え……？あ、そういえば……」

元々このギルドに入る目的で来てたんだよな。

魔法のことで一杯になってわすれてたぜ……

というか何だかもうこのギルドに入ってた気分だったし……

「はいっ！　このギルドに入らせていただきます！」

「うむ。嬉しい答えじゃ。ならば、契約を交わすぞい」

「契約？」

「そうじゃ。このギルドの一員である証の契約じゃ」

「はい。分かりました」
「では……。ゴホン。サミダレコウヘイ、汝は我がリバティドラゴンの一員となり、このギルドに反することなく、世の為に魔法を使用することを誓うか？」
「はい、誓います」

俺がそういった瞬間、俺の体が光に包まれ、手の平ぐ光った。
そして、一つの龍のタトゥーのようなものと下に見たことの無い文字。
しかしそこにはリバティドラゴンと書かれていることが分かった。
段々と俺を包んでいた光が消え、元に戻る。

「よし、これでコウヘイも今日からリバティドラゴンと一員じゃ！」
「ありがとうございます！」
「よかったなコウヘイ！」
「ああ！」

『凄いぞ！　伝説の魔法を使うやつがギルドに入るんだ！』
『また新しい仲間か！』
『よろしくな！』

リクトだけでなく、周りの人たちも皆、俺を歓迎してくれるかのように言葉を交わしてくれた。

「はい！　皆さん、よろしくお願いします！」

龍の尻尾《ドラゴンテイル》

俺がこの『自由の龍（リバティドラゴン）』に入って早二週間。
ギルドの決まりやルールを教えてもらい、だいぶギルドの人たちの名前も覚えて、同い年くらいの親しいやつも増えてきた今日この頃、俺はリクトと一緒にクロレスさんに呼ばれた。

「マスター、何の用だ？」
「おお、来たか二人とも。今日は二人に大事な話があってのぉ」
「大事な話？　一体なんでしょう？」
「ふむ、それは今から説明するのじゃが……おお、レオン達も来たようじゃ」
「おう、何の用だマスター？」
「何かあったんですか？」
「もしかしてまたお使い？」
「うわ～！　楽しみ楽しみ！」

やってきたのは男一人と女の子三人。
四人とも、最近仲良くなった同い年のやつらばっかりだ。
一人目はレオン・アルベルト。男。造雷魔法を使う魔導師で、どこか落ち着いた雰囲気を持っているやつだ。
二人目はリサ・クリスティーナ。自然魔法の使い手で、大人しく、和やかな雰囲気が特徴的。
三人目はウェンディー・マグレスタ。使獣魔法を使っており、いつもしっかりしている。
最後はメル・フレステント。流星魔法を使う、能天気なやつ。
確か、皆まだ本格的な仕事をやらせてもらえてないはずだが……何で集めたんだ……？

「うむ。皆も集まったようじゃし、要件を伝えようかの」
「で、その要件は？」
「お主らもだいぶ大きくなった。もうそろそろ、ギルドの一員として活動し始めてもいい頃合いじゃ。新しくコウヘイも入ったことじゃし、お主ら6人でチームを組んで活動し始めてはどうかの？」
「マ、マジかマスター！？　やっと依頼ができるのか！？」
「やっとか……！　やっとこの時が来たのか……っ！」

チーム……か。
このギルドで仕事をするときに、ほとんどの人たちがチームを組んで活動していることは知っていた。
その方が、もしもの時の為に都合がいいし、便利らしい。
まだギルドに入ったばかりの俺はチームのことなんて考えきれなかった。
それがこいつらとすることになるんだな……。
足引っ張らねえように頑張らねえと！

「それではチーム名を決めてからまたワシのところへ来るとよい」
「「「はい！」」」

全員で元気よく返事をすると、クロレスさんは満足そうにどこかへ行った。

「やったねリクト！」
「おう！　やっとこの時が来たぜ！」
「本当によかったですね」
「ああ。ずっと待ち望んでいたからな。コウヘイとも一緒に仕事できるみたいだし、よかったぜ」
「それは俺も助かった。たぶんレオンたちとじゃねえと他に頼める人が居ねえし……」

「はいはい。喜んでるのはいいけど、先にチーム名を決めましょうよ。さっさとマスターに届けでて仕事しましょ？」
「それもそうだね」
「んなもん分かってるよ！　チーム名は『チームリクト』だ！！」
「「「……」」」

俺たちは冷めた目でリクトを見る。
いくらなんでも『チームリクト』はねぇだろ……

「な、なんだよその目は……」
「『チームリクト』って何よ……」
「五歳児でもそんな幼稚な名前付けねえよ……」
「流石に酷いですね……」
「なんだかバカっぽいよ……？」
「俺もフォローは出来ねえ……」
「っ！？　だ、だったら他に何があるんだよ！」
「それを今から考えるんだろうが」
「そうよ。もっと考えて決めないと」
「ちぇ。俺は考えるのが苦手なのによ」
「だからバカって言われるんだよ」
「うるせえメル！」
「はいはい。リクトは黙って。何かいい名前ってないかな？」
「あー……一つだけ案が……」

俺はおずおずと手を挙げる。
パッとした思いつきだが、悪くはないと思う。

「何？　聞かせて？」
「『龍の尻尾（ドラゴンテイル）』ってのはどうだ？俺たち……特に俺なんかはまだまだ新人で下っ端だけど、これから頑張ってこのギルドの名に恥ぬよ

うについて行くって意味を込めて『ドラゴンテイル』。どうだ？」
「ドラゴンテイルか……俺は気に入ったな。いいんじゃねえのか？」
「そうね……私もいいネーミングだと思う！」
「確かに！　何だかその意味も好きです！」
「少なくともリクトのより数百倍はいいよ！」
「ま、まあ確かにいいかも……」
「それじゃ、私たちのチームの名前は『ドラゴンテイル』で決定ね！」
「よし、今日から俺たち『ドラゴンテイル』の活動開始だ！」
「「「おう！」」」

皆が家族

「ほう、『龍の尻尾（ドラゴンテイル）』と名付けたのか。いいではないか」
「へへっ！　そうだろ？」
「こらリクト！　リクトが考えたんじゃないでしょうが！」
「そうだぞ。コウヘイが考えたのにお前が威張ってどうするんだよ」
「ははっ！　それではドラゴンテイルの活動申請を受け取るとするかの。今日からはギルドの一員としての自覚をより一層持って仕事に励むがよい」
「「「はいっ！！」」」
「それとコウヘイ、気をつけるのじゃぞ？」
「へ……？　何をですか？」
「零魔法は人の生死に直接関わる魔法、そして、魔力の増減、操作する魔法は使えんことを忘れるでない。敵に隙を作ることになるからの」
「はい、分かってます」
「それと、いくら伝説の魔法じゃからといって無茶は禁物じゃ。魔法は使い方次第でいくらでも強くなれるもんじゃから、お主が敗れる可能性を十分にあるからの」
「ご忠告ありがとうございます」

過信は禁物ってことか。
まあ最初から過信なんてないが、気をつけておこう。
クロレスさんに軽くお辞儀をすると、早速依頼掲示板を見ているリクトたちの元へと向かった。

「どうだリクト？　何かいい仕事あったか？」
「いや、まだだ。ここは一発デカイ仕事を……って痛っ！？」
報酬額の高い仕事に目を通していたリクトの頭をウェンディーが叩く。

「何するんだウェンディー！？」
「何するんだじゃないでしょうが！　最初の仕事なのよ！？　ここは仕事を覚えるって意味で簡単な仕事を選びなさいよ！」
「それもそうですね。最初の仕事で躓くのは嫌ですしね」
「大丈夫だって。俺がいるんだし失敗なんてしないしない！　大船に乗った気持ちでいろよ！」
「リクトがいるから心配なんだけどね。泥舟にでも乗った気分だよ。でなけりゃタイタニック号」
「……っ！　うるせえメル！」

……いいなぁ…。

俺はリクトたちのやり取りを見てそう思った。
このギルドに入って、確かにリクトやレオン、メルたちとは仲良くなったものの、こんな風に冗談言って笑えるような関係にはなっていない（と思う）。
俺も早くこんな風に楽しく話してぇ……

「どうしたコウヘイ。さっきからボーッとリクト達を見てるが？」
「いや、ちょっとな。羨ましく思ってただけだ」
「羨ましいのか？」
「まあな。俺もあんな風にボケたりツッこんだりしたくてよ」
「ならすればいいじゃねえか」

「出来たら苦労なんてしねえよ。レオン達とだって、知り合ってまだ二週間も経ってないんだぜ？いくら仲良くなったからとは言っても、そう簡単にはいかねえよ」
「そうか？　こんな風にお前が俺にそのことを話してるくらいなんだし出来るだろ」
「へ？　あ、そういえばそうだな……。でも、レオンには何となく相談出来るってだけだよ」
「それは頼られてるってことでいいのか？」
「どうぞご自由に」
「そこ流すなよ……。ったく、そんなこと気にするなよ。『二週間も経ってない』だ？　関係ない。俺なんて、ギルドに入って三日でリクトと喧嘩したぜ？」
「早……。お前達って仲悪いのか？」
「いや。寧ろいい方だ。喧嘩するほど仲がいいって言うだろ？」
「とはいっても入って三日で喧嘩って……」
「だから関係ないって。このギルドは皆そんなことは気にしない。入ったその日から家族なんだよ」
「家族……？」
「リクトから聞いただろうが。ここはいろんな事情を持ったやつらが集まるって。だから新しいやつでもここにくれば一緒だ。一人新しい家族が増えたみたいなもんだからよ」
「だからってすぐ仲良くなれるもんか？」
「おう。当たり前だ。それに、俺達なんてチーム組んだ仲間だろ？　だったら尚更じゃねえか。ボケかましたらいい。ツッこんだらいい。誰一人として怒るやつも責めるやつもいねえよ」
「そうか……ありがとな。なんかスッキリした。俺、今日から少しずつあの輪に混じっていくわ」
「ああ、そうしろ」
こいつらが俺を迎え入れてくれたんだ。

だったら、少しずつでも入っていかねえとな。

……つかこっちの世界でもタイタニックって通じるんだ……。

「ねえコウヘイ、コウヘイはこっちとこれ、どっちの依頼がいいと思う？」

「ん？　どれどれ？」

俺も輪に溶け込めるはずだよな。きっと。

最初の仕事

「ねえコウヘイ、コウヘイはこっちとこれ、どっちの依頼がいいと思う？」
「ん？　どれどれ？」

ウェンディーに渡された二つの紙を手にとって見てみる。
依頼内容は、警備系と討伐系。

もっと詳しく言うと、警備系のほうはここらじゃ有名な資産家の人が出張をするとのことで、その間家を見守っていてほしいとのこと。
討伐系は最近勢力を強めつつある魔導師集団が『漆黒の森』に現れたので倒してほしいとのこと。

『ここらで有名』だとか、『最近』なんて言葉を使ったが、実際はどれほどなのかは知らない。

報酬は共に変わらないが、仕事の日数は警備が一週間、討伐は倒すまでと異なる。

「私は同じ報酬で危険の少ない警備の仕事がいいと思ったんだけど……」
「そうだな……確かに警備の仕事もいいかもしれないが、討伐の方がいいと思う。見た感じだと、無理そうな依頼でもないし、俺達自身の実力を計る上でもいいんじゃないか？」

実際、俺も少しは自分の実力試してみたいし。
凄い魔法ってのは分かるんだが、やっぱり使ってみたくなるものだ。

「そっかぁ……レオンは？」
「俺もコウヘイに賛成だな。どうせリクトが討伐系の仕事をしたいって言ってたし、最初の仕事が警備一週間ってのもなあ……」

うんうん。
確かにリオンの言うとおり。
警備して何も起こらなかったら何もせずに最初の仕事が終了だもんな。

「了解。たぶん、リクトはレオンの言ったとおり、討伐のほうに賛成すると思うし、リサはリオンが討伐って言うならそれに賛成すると思う。メルも元々討伐だったし、これで決定ね」
「それいいが……なぜ俺が討伐だとリサも討伐にするんだ？」
「女心ってやつよ」
「なんだそれ……」

ほう、つまりはリサはリオンが好きってことなのか……
リア充は死ｎ……ゲホゲホ、羨ましいぜ……

「それじゃ、一応二人に確認取ってからマスターに伝えてくるね」
「ああ」

☆★☆★☆★☆

「皆！　マスターに許可を貰ってきたよ！」
「マジか！　よっしゃ！　そうと決まればさっさと行こうぜ！」

おいおいリクト……
お前ははしゃぎ過ぎだろ……少しは落ち着けないのか……？

「慌てないのリクト。まだ何の準備もしてないのよ？　『漆黒の森』に行くんだし、方位磁石は必須だし、そのほかにも必要なものとかあるんだから。今日は必要な物を買いに行くから出発は明日よ」

へえ、意外にこっちもそういう準備ってするんだな。
当然ちゃ当然だが、なんか不思議で面白い。

「んなもんいらねえって！　俺が三分でそいつらぶっ飛ばすからよ！」
「そういう問題じゃないの。というかあんたじゃ出来ないでしょうが」
「そんなことねえ！」
「落ち着けリクト。ウェンディーの言う通りだ。明日まで待とうぜ。どうせ漆黒の森にいるやつらも何らかの理由でそこにいるんだ。逃げはしないさ」

俺はウェンディーの方を持ち、言った。
本当に困ったときに何か起きると大変だしな。転ばぬ先の杖ってやつだ。

「コ、コウヘイまで……。分かったよ。明日まで待つ」
「ありがとねコウヘイ」

「ああ、気にするな。準備はウェンディーに任せていいのか？」
「ええ。もちろん」
「それじゃ、任せた」
「凄いなコウヘイ。もうリクトを手懐けたのか。餌付けでもしたか？」
「手懐けられてなんかねえ！」

くすっと笑いながらこちらを見るレオン。
その目のは『こいつ、弄ろうぜ』と書かれている。

「ああ、まあな」
「コウヘイもリオンのボケに乗るなぁぁーー！！」
「はは！　あの三人仲いいね」
「そうですね。リクトが弄られてるだけのようにも見えますが」

結局、リクト弄りはしばらくの間続いた。

よっしゃ！明日は初めての仕事だ。気合入れていかないとな。

☆★☆★☆★☆

漆黒の森ーー

「ガハッ！？」
「弱い……。これでも本当に魔導師か？」
「く……っ！なんで…ここまで…強…いんだ……？」
「ふんっ。そこらの弱小正規ギルドのくせに、偶々ここの通りかけただけで我々を倒そうとなどするからだ」
「最近勢力を伸ばしてきた集団だと聞いていたのに、まさか闇ギルド『人狼の鉤爪（ワーウルフクロー）』だったなんて……！」
「勢力を伸ばしたというのは我々の下っ端のことだ。まあ、お前くらいの実力であれば倒せはするが、俺は倒せない」
「噂に聞く強さだ……っ！　『変形の魔術師』マスター・サデス……」
「そう、あらゆる物を変形させる俺に敵うやつなどいないのだよ」
「流石は兄貴です。こうも簡単に正規ギルドのやつを倒すなんて」
「こんなやつを倒すなど朝飯前だ」
「兄貴、伝達です。『リバティドラゴン』の魔導師数名が、明日この森に我々の討伐にくるようです」
「ほう……？　どんなやつらだ？」
「小僧が六人ほどとの報告でございます」
「それはまた随分となめられたものだな。まあいい。その『自由の龍』を捕まえて自由を失くしてやろうではないか」

最初の仕事（後書き）

すみません……
マスターの名前がかぶったことに気づきました……
あ、知らない人は気にしないでください。
これからもよろしくお願いします！！

突然の敵

漆黒の森ーー

俺がリクトやレオンたちと『龍の尻尾（ドラゴンテイル）』を結成してから一日。
当然のことながら、結成後初めての仕事を行うため、俺達は漆黒の森へとやってきた。

ザワザワザワ

「な、何の音！？」
「ただ木が風で揺れただけだよ。怖がりすぎだろ」
「だ、だって暗いしなんだか薄気味悪いし……」

その名の通り、この森はまだ白昼だというのにも関わらず辺りが暗く、まるで闇に包まれた夜のようだ。
ウェンディーが念のために買ってきていたランタンの光を頼りに道を進んでいるが、それを買ってきたウェンディーには何の役にも立たず、先ほどからずっと怖がってリクトの服を掴んでいる。

「ね、ねえ。本当にこんなところに人なんているの……？」
「いるから来てるんだろうが。というか服から手を離さないか？俺が歩きづらいんだが……」
「す、少しくらいいいでしょ？　減るもんじゃないんだし」
「まあそれはそうだが……」

顔をしかめながら前を向きなおすリクト。
くそ……今のお前の状況は一般男子からしたらかなりオイシイ状況だってのに……

リサもさりげなくレオンの服握ってるし、なんだか俺だけ場違い……
チラッとメルを見てみるが怖がった様子が微塵もない。
「メ、メルは怖くないのか？」
「全然。こういうのは昔から得意な方なんだ～」
「そうですか……」
別に期待をしていたわけではないが、隣でこんなことされてると…
ねぇ……？
「ま、まあコウヘイがあの二人みたいにしてほしいって言うならしてもいいけど……」
「いや、気にするな。別に無理しなくてもいいぞ」
「そ、そう……無理しなくていい……ね……」
うんうん。俺意外といいこと言ったぞ！
なんでメルが少しだけションボリしてるのかは知らんが。
いい雰囲気の二人組みのむかつk…ゲホゲホ、微笑ましい姿で場がピンク色になってきた時だった。
何か感じる！？
「危ない！　皆避けろ！」
不意に感じた何かから、危険を感じた俺は瞬時に皆をまとめて押す。
同時に俺達がいた場所に氷の塊が勢いよく落ちた。
これは魔法！？
「な、なんだ急に！？」

突然の攻撃に慌てる皆。
一体誰が……なんて思っていると俺は気づいた。
「おい……俺達囲まれてるぞ……」
「な、何！？」
押したときに落としてしまったランタンを拾い上げて辺りを照らすと、思ったとおり、俺達は黒い服に怪しそうな仮面で顔を隠した集団に囲まれていた。
こいつら……もしかして……
「い、一体なんなんだこいつらは！？」
「おそらく、俺達の今回の目的である魔導師集団だろうな」
「ああ。それが有力だな。他にここにいるやつらなんて想像できないし」
一気にことを理解して真剣な顔つきに変えるリオン。
物分りが早いといいぜ。
「で、でもこいつら……！」
「俺も思った。どうやら俺達は今回の仕事を甘く見ていたようだ」
「そうだな。ホットチョコレートに更に蜂蜜と練乳入れるくらいに甘かったぜ……」
「リオン、この状況じゃそんなこと言う余裕ないぜ……？」
「ま、そうだよな」
そう、俺達は本当に状況を甘く見ていた。なぜならーー
「この人達、人数多すぎませんか！？」

ー敵の数が多すぎるからだ。
ざっとみて５００人以上。どう考えても多すぎる。
一体いつの間にこんな大勢に囲まれてたんだよ……

「ちょっと状況が悪すぎな……」
「関係ねえ！　燃えてきたぜ！　さっさとぶっ飛ばしてやらあ！」

目的の敵が現れたことによって一気にテンションが上がるリクト。
まずい……

「やめろリクト。今は勢いで行く場面じゃない」
「なんでだよ。こんなやつらあっという間に……」
「考えろ。どう考えても敵が多すぎる。なのに全然スペースがないだろうが……」
「それじゃあどうするんだよ……」
「俺が魔法を撃って少しだけ隙を作る。だからその瞬間に三組に分かれるぞ。ほれランタンだ」

手持ちのランタンをリクトとレオンに渡して、今にも魔法を撃ちそうなやつと向き合う。

「お、おい。ランタンは二つだぞ？　それに組み合わせはどうするんだ？」
「俺の方は魔法でなんとかするからいい。リクトはウェンディーと、レオンはリサと。メルは俺。いいな？」
「だ、だが……」
「今迷ってる暇はないんだ。いいからやるぞ」
「お、おう」

『氷塊砲（アイスバスター）！！』

なかなか動こうとしない俺達に痺れを切らしたのか、先ほど俺達を襲った氷の塊が再びくる。

「接収（ドレイン）！」

今度は落ち着いて零魔法を発動し、その塊を吸収する。

おうおう、驚いてるぜ。

「お、俺の魔法が消えた！？」

「驚くのはまだまだここからだぜ？　反転（カウンター）！」

昨日聞いた効果どおり、今度は俺の方から相手が放った魔法の二倍の大きさの氷の塊が相手を襲う。

うわぁ……やっぱえげつないな……

っと、そんなこと思ってる暇ないんだった。

「皆！　今だ！」

「「「了解！」」」

俺が指示を出すと、皆は先ほど言ったとおりに慌てふためく相手を通り抜け、三手に分かれた。

皆、上手くやってくれよ……

各自の成功を祈りながら、俺はメルと共に暗い森を走った。

三闘士（前書き）

総合ポイント２００ポイント突破！
これからもよろしくお願いします！！

三闘士

「龍の砲弾（ドラゴンバスター）！」
「流星（メテオ）！！」

ズドオォォォォンーー！！

凄まじい音が鳴り響き、周りの木ごと敵を吹っ飛ばす。

「な、なんだあの威力は！？」
「木が一瞬にして消えたぞ！？」
「こいつら本当に新人魔導師か！？」

想像範囲外の威力に戸惑っている敵を前に、俺とメルはあくまでも冷静に状況を判断。

「全然敵が減らねえな……」
「うん、そうだね……このままじゃ埒が開かないよ……」

追ってきたのはざっと２００人程。
二人だから一人あたり１００人だが、女の子にそう苦労させるわけにもいかないしな……
ここは一発デカいのぶち込むか。

「神聖なる大地の神よ。我に盛大なる大地の力を！　」

神経を手に集中させ呪文を唱える。
俺たちを囲んでいる敵は隆起した地面の攻撃を受け一掃……かと思いきや……

「ちっ……まだいるのかよ……」
「かなり渋といやつらだね……」

「へっ！　こっちだってそう簡単にお前らに負けるわけにはいかないんだよ！」

着実に数は減っているものの、中々０にならない。
他のやつを倒している間にまた復活してやってくる繰り返しで、かなり面倒だ。

「とは言っても、あんたらの攻撃、まだ一度も当たってないぜ？」
「うるせえ！　これでもくらえ！　雷砲（バスターボルト）！」
「そんなもん効かねえよ！　接収（ドレイン）！」
「ま、また吸い込まれただと！？」
「ったく、少しは学習しろよ」

俺には遠距離攻撃は通用しないっていうのによ。
ま、こうやって攻撃してくれた方が助かるんだけど。

「さて、続けて行くぜ！　反転（カウンター）！！」
「「「ゴハァァッッ！？」」」
「ふぅ……後何人残ってるんだ？」
「そうだね……後５０人くらいかな？」
「やっと四分の一か……キツイな……」
「でも、コウヘイでこんなに大変なのに、ウェンディーやリサたちは大丈夫かな……」
「分からない。だが、俺たちもあんまり他所を心配する余裕はないぞ……」
「そうだよね。とりあえずは目の前の敵を倒さなくちゃ」

今はただ、向こうも無事であることを願うしかないからな……
上手くやっててくれよ……

「くそ……っ！いくら攻撃しても全部吸い込まれちまう！」
「しかも必ずこっちに返ってくるぞ……？　どうするんだ……？」
「どうするもこうするも、あの方の指示だ。倒すしかねえ！　躊躇うな！」
「「「おおっ！！！」」」

あの方……？
もしかしてこいつらの集団のトップはまだ動いてないのか……？

「コウヘイ、危ないっ！」
「おわっと！？　す、すまんメル」
「気をつけてよ？　相手も気合いを入れ直してるから……」
「ああ。悪いな」

「お前ら！　ここまでだ！」
「っ！？　誰だ！？」

もう一発デカい魔法を放とうとした時、木の上から声がした。

「レクソム様！」

生き残っている敵の一人が、木の枝の上に立っている一人の男を差しながら言った。
『様』……？
もしかしてあいつが頭か……？

「よお、あんたら。ここからは俺が相手をしてやるぜ？」
レクソムと呼ばれたその男は、木から飛び降りて俺たちの前に着地する。
「レクソム様、いいのです？」
「ああ。こいつら、中々強いじゃねえか。お前らが勝てる相手じゃねえ。だからここは俺様が直々に倒してやるぜ」
「ほう？　えらい自信だな？」
ここはあえて強がってみる俺。
こいつの強さが未知数な為、一体どれほどなのかが分からないが、とりあえずハッタリだ。
「ケッ。俺様のことを知ってるのか？」
「知るわけないだろうが。弱そうだな？」
挑発するように言ってみたが、男は再び『ケッ』と笑うとこう言った。
「なら教えてやるよ。俺はギルド『人狼の鉤爪（ワーウルフクロー）』の三闘士の一人、レクソム・フルレイム様だ！」
「ワ、ワーウルフクロー！？」
声高々にそう言った男の言葉に、メルがビクッと動き、驚いた。
ギルドだと……？
しかもメルのやつ、何か知ってるみたいだ……
「なあメル、『ワーウルフクロー』ってのはどんなギルドなんだ？」
「『人狼の鉤爪（ワーウルフクロー）』。闇ギルドの一つで、マスターサデスと、その取

り巻きである三闘士は、かなりの実力者だって聞いたことがある……」
「闇ギルドって何なんだ？俺たちのギルドと何か違うのか？」
「うん……闇ギルドっていうのは、法律違反の仕事も請け負うギルドのことで、全世界で色んな闇ギルドが指名手配されてるの……。でも、闇ギルドには強い魔導師が集まっていることもあって、中々ギルド自体が消滅することは少ない。そして『ワーウルフクロー』はそんな闇ギルドの一つ……。ついでにいっておくと『リバティドラゴン』みたいに違反をしていないギルドのことを逆に正規ギルドっていうの」
「説明ありがと」

大体話は掴めた。
要するに、俺の目の前にいるのはその違反をしてるギルドの強いやつの一人ってわけか……

「でも、何でワーウルフクローがここに……？」
「よく知らねえが……もしかすると俺たちが倒さなくちゃいけない集団がこのワーウルフクローだったりな？」
「ほう？　頭冴えるじゃねえか。お前さんのいう通りだよ。だからここでお前たちには潰れてもらうんだ」
「潰されるわけにはいかないな。俺だってまだ生きたいし。それとマナーはキチンと守ろうぜ？」
「ケッ。所詮正規ギルドなんてビビりで弱っちいやつらが集まるチキン集団だ。俺があっという間に潰してやるぜ！」
「やれるもんならやってみろよ！」

へぇ……闇ギルドねぇ……
面白いじゃねえか！

魔剣豪のレクソム

「さて、俺はいつでもいいぜ？　かかってこいよ」

クイッ、クイッと人差し指を曲げて挑発してくるレクソム。
ここはあえて挑発に乗っていくか……？
……いや、こいつがどんな魔法を使うかは知らねえしな。
向こうから動くのを待つとするか……

「（コウヘイ、いかないの……？）」
「（ああ。こいつがどんな魔法を使ってくるのか知らないからな。むやみに動くのはよくない）」
「（そっか。分かった）」

小声でメルに考えを伝えた俺は、レクソムを見据えていつ動いてもいいようにする。
さて、どう動いてくるか……？

「何だ？　こないのか？」
「……」
「様子見ってやつか？」
「……」
「ケッ。何も話さねえのかよ」

当たり前だ。こっちの考えをそうやすやすと話すわけがない。
少しでも慎重にやっていかないと、隙を見せることになる。

「まあいい。お前たちがそのつもりなら、こっちからいかせてもらぜ！」

仕掛けてきたか。
どんな魔法を使って……

「っ！？」

こいつ、一気に間合いを詰めてきただと！？
レクソムは攻撃せずに、一瞬で俺に接近してきた。
一体どういうつもりなんだ！？
普通ならまずは魔法を放ってくるはず……
っ！！　もしかしてこいつ……っ！
懐に入ってきたレクソムを避け、後ろに下がり距離をとった俺は一つの考えにたどり着いた。

「その顔だと、どうやら気がついたみたいだな。そうだ。俺が使うのは……」

そういって、レクソムはある物を取り出した。
やはり思ったとおりだ……

「「剣……っ！」」

俺とメルは思わずハモってしまう。
レクソムが手に持っているのは紛れもなく剣だった。
それも、魔力を感じる剣、魔法剣である。
くそ……これはやっかいだな……

「俺はそこそこ有名な剣豪だったんだよ。『剣豪のレクソム』なんてよく言われてた。ま、ここ『ワーウルフクロー』に入ってからは『闇剣豪のレクソム』だがな」

「細かい情報までありがとよ」
「俺はお前の魔法を見たからよ。お前も俺の魔法を知らねえとアンフェアだろ？」
「闇ギルドのくせにそういうことは気にするんだな」
「ケッ。上げ足取るなよ。それに教えた理由はもう一つある」
「ああ、気づいてるよ」
「だろうな。その理由はーー」

こいつが俺にわざわざ剣の存在を教えたのはこいつの言ったフェアにやりたいという部分もある。
だが、俺はいままで全部の魔法を吸収して、一つも攻撃を当てられていない俺にそんな余裕を見せることができる理由。
それはただ一つだけ。

「ーー俺の剣はおまえの魔法じゃ吸収できないからな」
「やっぱりな……」

零魔法の『接収（ドレイン）』の弱点の一つ、物理系の魔法は吸収できない。
こいつ、俺の魔法を見てて気づいていやがった……

「流石に魔法を吸い込まれると勝てねえからな。だが、吸い込まれなければいいんだよ」
「確かに、お前の言うとおりだ」

吸収されない魔法を使うことは俺にとって困ることだ。
だが……

「だがな、俺は吸収できなくても攻撃は出来るんだよ！　紅炎（プロミネンス）！！」
向こう側の魔法も分かったので俺は攻撃される前にこちらから仕掛

ける。
吸収できないとなれば待つ必要性もないからな。
真っ赤な炎が相手を包みこん……だと思ったのだが……
「換装（チェンジ）！　豪炎剣！」
火の向こう側からそんな声が聞こえたかと思うと次の瞬間、俺の放った炎が真っ二つに切り裂かれた。
そ、そんなバカな……！
「な……っ！？　魔法を切り裂いただと……！？」
「ありえない……魔法を切り裂く魔法剣だなんて……」
「そう驚くなよ。お前だって変わった魔法使うじゃねえかよ。これからが本番…だろ？」
ニヤッと不敵な笑みを浮かべながらレクソムは言った。
「さて、これで条件はイーブンだ。俺もお前も互いの魔法を知ってるんだ。ここからは手加減なし。本気だぜ？」
「……」
こいつ……ということはさっきの懐に入ってきたのもわざと避け易くするためにか……？
それにしては動きがかなり早かったぞ……
「んなしかめっ面するなってば。せっかく久しぶりに面白い戦いが出来ると思ってこっちはウハウハなんだぜ？」
「お生憎様。俺はここに遊びにきたわけじゃないんでね。あんたと遊んでる暇はないんだが……」
「ここからは俺を倒さないと動けないぜ？」

「……どうやらそのようだな」

くそ……っ！

早くリクト達とも合流しないといけないが、倒すしか道はないのか！？

「安心しろ。お前の仲間も残りの三闘士と今頃勝負してるころだぜ？」

「リ、リサたちも！？」

「マジかよ……」

こりゃ、いよいよ戦うしかなくなったってわけか……

まあいい。とりあえずあいつと距離をとりながら戦うか。

「ねえコウヘイ、どうする？」

「戦うさ。でないとここから動けないしな。メルは下がってろここは俺一人で……」

「ダメ。私だって戦いたい！　コウヘイばっかりに負担させるわけにはいかないもん！」

「……無茶すんなよ」

「どうやら覚悟ができたみたいだな。そんじゃ、改めて自己紹介するぜ。俺は『人狼の鉤爪（ワーウルフクロー）』の三闘士の一人、魔法剣を使うレクソム・フルレイム。またの名を『闇の魔剣豪レクソム』だ」

使いこなせない魔法

「闇の波動（ダークウェーブ）！！」
「換装（チェンジ）、闇黒剣！」

くそ……っ！これで五回目だ……！
レクソムとの勝負が始まり、繰り返し攻撃を続ける俺であったが、全ての攻撃を剣で切り裂かれてしまう。
こいつ、換装が早すぎる……！
俺が攻撃を放ってからすぐにその魔法に合った剣に変え、次々に切り裂いていくレクソムは、敵ながら、流石は魔剣豪と呼ばれているだけのことはある。

「おいおい、まだ一回も当たってないぜ？　お前の攻撃はこんなものか？」
「……っ！」

悔しいが実際に攻撃は当たっていないので、言い返せない。
どうやったら攻撃が当たるんだ……？

遠距離攻撃は当たらない。
接近してからの攻撃は当たるかもしれないが、近づくと攻撃するよりも先にあの剣で切られそうだ……

「ケケッ。あれだけ勢いがあったってのに、もう降参か？」
「へっ、そんなことするわけないだろ。それと、そんなに余裕ぶっこいてていいのか？　気をつけないと……」
「隙を攻撃されるよ！　私の存在忘れないでよね！　流星（メテオ）！！」
「なっ！？　しまった！」

リクソムの気がこちらに向いている間に後ろに回っていたメルが、
一気に攻撃を仕掛ける。
よしっ！　完全いにフリーだ！
あいつ気づいていなかったぞ！

メルの不意の攻撃で早くもレクソムを倒した……と思ったのだが、

「な～んて、俺が気づいてなかったとでも思ったのか？」

レクソムはすぐに振り返ると魔法隕石を切る。
そして……

「メルっ！　危ない！」
「えっ？　キャッ！！」

そのままメルに攻撃を仕掛けたレクソム。
切られて粉々に飛び散っている隕石のせいで、レクソムの動きが見えなかったメルは逆にレクソムに不意を突かれる。
こ、このままじゃメルが！
俺は素早くメルの元に。
そして、メルの体を押したのと同時に、レクソムの剣も振り下ろされる。

スパッ！

体をすこしズラした為、幸い体ごと切られることはなかったが、腕に血が流れた。

「チッ、外したか……」

「コ、コウヘイ大丈夫！？」
「ああ、まだ大丈夫だ。安心しろ」
痛む腕を押さえて、魔法を唱える。
「氷結」
出血口に氷が張り付かせ、止血を行った俺は、メルを見た。
うん、よかった、どうやら怪我はなかったようだ。
「ご、ごめんコウヘイ……私が油断してたから……」
「気にするなって。それより怪我しなくて何よりだ」
「おうおう。いい雰囲気になってるところ悪いが、さっさとケリつけようぜ。俺だって、まだ他に仕事が残ってるんだからよ」
「そのクセして、俺と戦うのか？」
「当たり前だ。お前を倒すのも俺の仕事だからな」
チッ……
ということはこの勝負に引き分けはないってことか……
どちらが先に倒されるかってことね……
「いいだろう！　だったら早くケリつけてやるよ！　俺が早く倒してやらぁ！」
「切られておいてよく言うぜ。攻撃が当たらないんじゃ勝てないぜ？」
「だったらその攻撃を当てたらいいんだよ！　炎雷（えんらい）！」
「な……っ！？」
俺が放ったのは火と雷の属性を持った魔法。
これで必ずどちらかの攻撃は当たるってことだ！

ある意味荒業とも言えるこの攻撃は、レクソムも意外だったらしく、対応が遅れる。
よし、これでやっと攻撃が……！

「っ！　双剣！」

なんて考えた俺が甘かった。
やつは剣を二つ装備し、またも俺の魔法を切り裂いた。
きっと炎の剣と雷の剣なのだろう……
まさか二刀流でもいけたとは……！

「ふぅ……まさか多属性魔法を使えたとは……」

剣を下ろすと、顔をしかめてこちらを見てくる。
どうやら今回は本当に驚いたらしい。
レクソムはしばらくの間、何か考えこむような様子で俺を見つめると、急にニヤリと笑った。

「な、なんだよ」
「多属性魔法。魔力が非常に高い魔導師が使用することができる魔法。いくつかの種類の魔法を織り交ぜることにより、威力、効果を高めることができる」
「……それがどうした」
「いや、そんな高い魔力を持ったやつと勝負すれば俺は負けると思ってよ」

なんだこいつ……？
一体何がいいたいんだ……？

「だがどうやら俺が負ける心配はないようだ」
「なんだと……？」
「それほど高い魔力を持ってるのに、さほど上手い戦い方とは言えねえ。この言葉の意味、分かるよな？」
「……」

俺の額から冷や汗が流れる。
もしかしたらこいつが言いたいことって……

「要するに、お前はまだ魔導師になったばかりのズブの素人ってわけだ。魔法が上手く使えねえんだったらどれほど高い魔力を持っていようが関係ねえ」

そしてレクソムはこう高々と宣言した。

「なら、俺が大人の戦い方を教えてやろうじゃねえか。ま、終わるころにお前が生きているかどうかは知らねえがな」

こいつ、こんな短時間で俺がまだ魔法を完璧に使えないことを見破りやがった……っ！

最後の望み

くそっ……
俺が魔導師になりたてでまだ上手く魔法が使えないことが暴露ちまった……
どうする……？

「魔法がいくら強いとはいえ、上手く使えねえんじゃ意味がねえよな？」
「……それはどうかな！　火炎風雷砲（トライアングルバスター）！！」

二つ組み合わせた魔法がダメなら三つで勝負だ！

「ほう？まだ上を使えたのか。だが、もう関係ねえ。激劉真、発動」
「な……っ！？」

更なる荒業を発動したにも関わらず、レクソムは一切慌てずにボソッと呟くと、三つの剣で魔法を切り裂いた。
三刀流だと……！？

「ケッ！　俺をナメるなよ？　さっきも言ったが、これでも名の通ってる剣豪なんだぜ？　これ位のこと、どうってこたぁねえさ」
「く……っ！」

となるとこれ以上無駄に魔法を重ねても意味がないのか……？
だとすれば俺の状況はかなりヤバいぞ……
いや……待てよ……？
俺はチラッとメルの方を見る。
さっきのメルの不意打ちは失敗したが、二人同時に攻撃すれば……

しかしそれでも防がれたら……？
よし！　ちょっとあの方法でやってみるか。

「（なあメル。お前って確か…ゴニョゴニョ…って魔法を使えなかったか？）」
「（う、うん。使えるよ。それがどうしたの？）」
「（よし、ならそれを使って…ゴニョゴニョ…をしてくれ。いいか？）」
「（そういうことだね。了解！）」
「（それじゃ行くぞ。3、2、1、ゴー！）」
「光速（ライトスピード）！」

俺の合図でメルがレクソムの後ろに廻った。
光速（ライトスピード）。
その名の通り、光の速さで動くことの出来る魔法で使用中に攻撃は出来ないものの、今のように相手の後ろに廻るのには最適の魔法だ。

「後ろに瞬間で移動しただと！？」
「私だって魔導師なんだから当然！　コウヘイ行くよ！」
「おう！」
「火炎風雷砲（トライアングルバスター）！！」
「聖光電（シャイニングスパーク）！！」

正面から俺の三重属性魔法が、後ろからはメルの魔法が飛び、レクソムを襲った。

「激劉真・改！」

しかしながら、レクソムは剣を４つ出し、またも攻撃を防ぐ。

「はっ！　幾らやっても無駄だっ！」
「それはどうかな？」
「私たちにはまだ策があるのよ！」

そう、俺たちはレクソムがこうやって更に攻撃を防ぐのを分かっていた。
だから次が本当の勝負！

「もう一度光速（ライトスピード）！！」

再び自身のスピードを上げるメル。
だがこれは先ほどと違う。
今回のはーー！

「なっ！？今度は女だけでなく男まで消えただと！？」

俺も一緒に移動したのだ。
無論、俺も光速を使っている、というわけではない。
『光速』の弱点はこの魔法の使用中は攻撃は出来ないというもの。
俺とメルはそれを補う為にメルが俺を持って移動し、それによりその弱点を埋めようとしているのだ。

「五連弾式火炎風雷砲（トライアングルバスター）！！」
「んなっ！？」

レクソムが驚くのも無理はない。
俺が繰り出したのは先程の三重属性魔法の五連式。
ただでさえ魔力を大量に使う魔法を使ったのだ。
正直言って、使った自分でもかなり無茶な攻撃である。しかしそれ

でも攻撃したのはこうでもしないとレクソムは倒せないと思ったからである。
これ以上無駄に攻撃して魔力を消費するくらいなら、ここで多く魔力を使って倒した方がよい。
そう判断しての、今回の行動だ。

「ちっ！　仕方ねえ、素人相手にこの技は使いたくなかったが……激劉真天聖疾風剣」

文字にすると漢字ばかりになりそうな言葉をボソッと唱えたレクソム。
次の瞬間、レクソムの持つ剣が宙に浮き、回転を行って俺の放った魔法を全て吸収した。

「なん……．だと……っ！？」
「今のでも効かない……！？」
「……これは余程の時しか使わないと決めていたんだが……まさか素人相手に使うことになるとはな……まあいい。お前らは侮れないな。多属性魔法を使う男に、瞬間移動を行う女。マスターから聞いた情報より強いな」

なんてこった……
レクソムに俺たちの実力を知らしめることは出来たが、ダメだ……っ！
渾身の攻撃すら防がれちまった……っ！

「お前らはよくやったよ。俺の最高防御魔法を出させるとは見事だ。だが、どうやらもうチェックメイトだな。多属性魔法は一回にかなりの魔力を消費するから、ここからはお前の魔力切れ待ちだ。それはお前だってもう気づいているはずだ」

「……」

確かに確実に魔力を消費していくのは俺の方だ……
魔法を創り出す魔法とはいっても、使える範囲の魔法でやつに対抗できる魔法は考えつかねえ……っ！
これが経験不足ってことか……？

「ま、そっちの女が使うのは光魔法みてえだし、気を抜かなければ俺の勝ちだな」

……ん？
光……魔法……？　……はっ！
もしかするとあれなら……っ！
再び考えを思いついた俺はメルにもう一度尋ねる。

「（メル、お前の光魔法はアレ、使えるか？）」
「（アレ？　う、うん。使えるけど……一瞬しか隙が作れないよ……？）」
「（よし、その一瞬でいい。　頼むぞ）」
「（何を考えてるのか分からないけど……分かったよ）」

これが成功しなければほとんど勝ち目がない。
ラストチャンスだ……

「いくよ！　発光（ライト）！」

メルが合図を出し、魔法を唱えると一瞬にして辺りが眩い光に包まれた。
元々ここが暗いこともあって、更に眩しく感じる。
そう、この魔法は所謂目くらまし。

一瞬、ほんの一瞬の隙を作る為の魔法。
よしっ！　今だ！

「くっ！　今の眩しさはなんだ！？」
「レクソム覚悟ォォーー！」
「……そこだぁ！」

一瞬の刹那、レクソムは後ろにいた俺を切り裂いた。
……が、

「な、なんだこれは！？」
「今だ！　氷結（ロック）！」

レクソムが切り裂いたのは俺が創り出したスライムで造られた俺の人形。
よって俺は痛くも痒くもない。
レクソムがそのスライムを切ったと同時に、俺は剣をスライムごと凍りつかせる。
これでもう剣は使えない！
後はトドメだ！

「本当の俺は上だよ！　火炎風雷砲（トライアングルバスター）！！」

キュイィィンーーードォォーン！！！

「グハァァァァーー！！！」

上からのトドメ。
レクソムは抵抗出来ずに、地面に倒れた。

「くそ……この…俺が……正規ギ…ルドの……素人…なんかに……負…ける……な……んて……」
「っっシャァァ！！」

冷氷のロキヤ

「勝ったんだな」
「うん、そうだね！」

倒れたレクソムを前に、俺とメルは安堵の息を吐いた。
あれが失敗してたら負けてたかもな……

「ねえコウヘイ、私一つだけ気になることがあったんだけど」
「ん？　なんだ？」
「どうしてレクソムはあんまり攻撃してこなかったのかな？」
「やっぱ気になったか？　実は俺も気になっていたんだ」

強いと豪語していたにも関わらず攻撃してきたのは挨拶がわりの一発目と、メルに切りかかった二発目。そして、最後に俺が作り出したスライムを切ろうとした三発のみ。
いくらなんでも攻撃の量が少ない。

「油断してたのかな？　もう少し遊んでから本気を出そうと思ってたけど、本気出す前にコウヘイが倒しちゃったとか」
「それはないな。レクソムは途中からかなり俺たちのことを警戒していた。手加減なんて入れてないはずだ」
「え？　じゃあなんで？」
「詳しいことは分からないが……」

ただ一つ、思い当たることならある。
レクソムが俺たちに攻撃しない理由が。

「もしかするとレクソムは攻撃したくても出来なかったんじゃない

のか？」
「攻撃したくても出来なかった？　一体どういうこと？」
「まあ簡単に言うと、攻撃すると自身も攻撃を喰らいやすくなるってことだよ」
「ああ！　そういうことね！」

魔法には大きく分けて二つの種類があり、俺やメル、リクト達のような直接魔法を使う能力系とレクソムのような剣などの武器を使う所持系が存在する。
レクソムの魔法は相手の魔法を切り裂くもの。
ただし、敵の魔法の属性を把握した上で切らなければならない。
自分から切りに行くということは、相手との距離を縮めることを意味し、敵の魔法の属性判断をする時間が短くなる。
だからレクソムは攻撃したくても出来なかったのだ。

「でも、なんで最後は攻撃してきたの？」
「きっと焦ったんだろうな。メルとの連携で俺がいつでもレクソムのすぐ後ろにまわることができるのを知って、早く仕掛けないといけないと思ったんだろう」
「そっかぁ。じゃあコウヘイの作戦勝ちだね」
「それもあるかもしれないが、一番はメルの魔法のおかげだ。ありがとな」
「ふぇ！？　そ、そんなことないよ／／／」

俺がメルの頭を撫でて、お礼を言うと、メルは顔を真っ赤にして否定した。
メルって恥ずかしがり屋なのか？

☆★☆★☆★

リクトside

「豪炎弾（バースト）！」

「疾風の聖霊フウト、召喚！」

俺の手からは炎が、ウェンディーの魔法陣から召喚聖霊が出てきて、それぞれが大勢の敵を捉える。

「ごめんリクト……私の魔法は広範囲じゃないから役に立たなくて……」

「気にするな。俺に任せとけって」

こんなやつら、俺一人で相手してやりたいくらいだ。

数は多いが個人は弱い。

時間はかかっても、倒せないレベルではないだろう。

一発デカイので勝負するか、それとも魔力の消費を抑えてゆっくり潰していくか……

いつもなら直感と勢いに身を任せていくところだが、今回は初めての仕事だし、ミスだけは避けたい。

だからどうしても慎重になってしまう。
そうやって次の攻撃を考えている最中、それは突然やってきた。

「氷針地割」

どこからともなく聞こえてきた冷たい声。
そして氷の針が地面を砕き、攻撃してきた。

俺達ではなく、敵を。

「なっ！？一体どうなってるんだ！？」
「何が起こってるの！？」

次々と現れる氷の槍が大勢の敵を倒していく。
その光景に俺もウェンディーも驚きを隠せない。
俺の知ってるやつにこんな攻撃できるやついねえぞ……！？
戸惑う間にも攻撃は続き、そして攻撃が止まった。
しかしそれは敵の全滅を意味するものでもある。

「嘘……だろ……？」

あれだけ倒すのに時間がかかると思った敵があっという間に倒される。
その事実は俺とウェンディーを震撼させるのには十分なものだった。

「ふぅ、やはり弱いな。カスも同然だ」

そんな言葉を口にしながら、近くの木から一人の男が現れる。
あれは……誰だ？

「おい……あんた誰だ？　これをやったのはあんたか？」
「そうだ。これをやったのは僕だ。無駄な手間を省いてあげたんだ。感謝してほしいね」
「一体何者だよ……？」
「僕？　僕は人狼の鉤爪（ワーウルフクロー）の三闘士の一人、ロキヤ・アイレンスさ」
「ワーウルフクロー……だと……？」

その名前は俺だって知ってる。
有名な闇ギルドだ。
でもなんで闇ギルドのやつが俺たちを助けるような真似を……

「三闘士……ロキヤ……。っ！？　リクト、気をつけて！」
「どうしたんだ…」

ウェンディーが何かに気がついたように焦って話しはじめた。

「こいつ、『冷氷のロキヤ』よ……」
「あの冷氷だと……っ！？」

『冷氷のロキヤ』。
噂によれば氷の魔法を使う魔導士で、その腕前はかなりのもの。
また、使う魔法と同じように、ロキヤ自身も氷の様に冷たく、冷酷だとか……

「ほぅ？　よく気がついたね。新人魔導士と聞いていたがよく知ってるじゃないか」
「……お前の目的はなんだ……？」
「僕の目的は君たちの抹殺さ」

サラッと放ったその言葉にはなんの躊躇いもない。

「なら……ならなんで俺たちを助けるような真似を……？」
「助けたわけではないね。ただ、新人魔導士相手に手こずっているカス達にお仕置きしただけさ」
「ってことはこいつらもワーウルフクローなのか……！？」
「そうさ。それがどうかしたかい？」
「なんで…なんで自分の仲間に攻撃なんてしたんだ！」
「なんだい？　君もまた、仲間について熱く語ろうっていうのかい？　僕は生憎そういう暑苦しいのは苦手でね」
「てめえ……っ！」

何でそんなに冷たいことが言えるんだよ……っ！！

「でもまあ、特別に教えてあげよう。こいつらはカスだ。カスはウチのギルドにはいらない」
「だが、それでも大事なギルドの一員だろうが！」
「甘いね。ワーウルフクローはこれからどんどん力を伸ばしていく。そうすれば自然に強い者が集まるんだよ。だったら弱い者は要らないんだ」
「ふざけｒ「ストップだ」…なっ！？」
「説教はこの僕を倒してからにしてくれ。ま、君たちが倒せるとは思わないけどね」
「面白い、やってやろうじゃねえか」

最初の仕事で三闘士と戦うとは思わなかったな。
まあそれもいい経験だ。

「必ずてめえをぶっ倒して仲間の大切さを教えてやるよ！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1404y/

最強の転生者って俺……？

2011年11月29日21時49分発行